

時空の漂泊

(二〇〇五年四月一日 第十号)

谷 弘一

川蒸気——浮かぶホテル——に乗って

今からほぼ二百年前、十九世紀初頭のアメリカ、夏のニューオルリーズが見える。帆もなければオールもない川蒸気船がミシシッピー川を遡航そこうしている。大きな煙突から煙をもくもくと吐き出している。大きな水車で濁った川の水を豪勢こうせいにかき回している。外輪船がいりんせんである。



<http://www.wku.edu/Library/kylm/collections/online/ellis/pages/690.html>

テル・ラウンジ、客室、どれも実に豪華な造りになっている。

ルの佇まいたたずである。豪華ホテルが豪勢に水を跳ね上げて走っている。

蒸し暑いのを我慢し、ブラック・タイを

川蒸気は、アメリカ人のヨーロッパへの

締め、山高帽やまたかぼうを被り、ステッキを小脇に

の憧れあこがをのせて走る船上ホテルである。

カクテル・ラウンジに行く。仮装パーティー

同時代、イギリスで馬車の延長線上で鉄

イーである。ジャズの喧騒なりズムが外

道が走り始めたのとは全く違う形で蒸気

輪が水を巻き上げる音と一緒に沸きあが

機関がアメリカでは普及し始めた。

っている。マティーニ^①やマンハッタン^②

イギリスのストックトンとダーリント

やホーシズ・ネック^③、マルガリータ^④を

ンの間を始めて蒸気機関車が走ったが、

片手に、着飾った紳士、淑女が賑やかに

その同じ鉄道上を、当初は車輪を付けた

談笑している。集まっている人々の底抜

馬車も走っていたそうだ。ちなみに鉄道

けに明るい顔を別にすれば、豪華なホテ

車両のコーチ (coach) という言葉は大

サロン、

型四輪馬車——ももとはハンガリー

ボール・

のコーチ (Kocs) 村で作られた四輪大型

ルーム、

馬車の性能が優れており、そのため四輪

ダイニン

大型馬車そのものを指すようになったも

グ・ルー

のなのだが——からきている。蒸気機

ム、カク

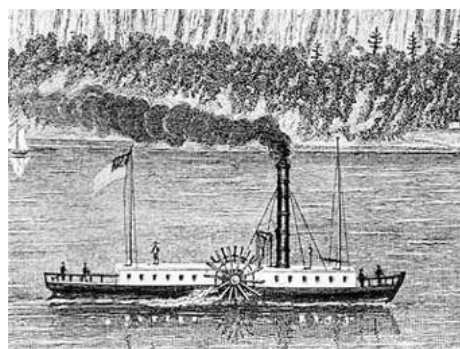
① ジンをベースにベルモット(葡萄酒にヨモギなどの成分を
浸み出させたもの)などを加え、それにオリーブの実を入
れたカクテル。
② ウイスキーをベースにベルモットなどを加えたカクテル。
③ ブランデーに入れ氷を加え、ジンジャーエールで満たし、
それにレモンの皮を薄くらせん状に切り取り、グラスに入れ
上端をグラスの縁にかけるカクテル。「馬の首」とは変わつ
た名前だが、ダービーの本場イギリスで、優勝したジョッキ
ーの祝杯用に作られたという。
④ テキーラ(竜舌蘭から作られた酒)をベースにライム・ジ
ューズなどを加えたカクテル。

関を使った交通手段が、イギリスでは馬車の延長線上で発達したのに対し、新大陸のアメリカでは、鉄道よりもまず川蒸気という形で発達したことは興味深い。

鉄道に先行した蒸気船

実は調べると、イギリスでも蒸気機関車よりも外輪船の歴史の方が古かった。

一七八八年、イギリスの湖で外輪船がいらんせんの走行実験が行なわれた記録がある。トレビックがロンドンの広場でレールに乗せた蒸気機関車を走らせたのが一八〇九年だったから、それよりも二十年以上も前のことである。ワットがニューコメン蒸気機関を改良し、さらに蒸気機関の上下運動を回転運動に変える改良に成功したのは一七八一年のことだったから、その七年後には蒸気船の走行実験が行なわれていたことになる。



<http://archive.ncsa.uiuc.edu/Cyberia/RiverWeb/Projects/Ambot/TECH/TECH5.htm>

この外輪船がいらんせんは新大陸のアメリカでいち早く導入された。一八〇七年にフルトン^⑤のクラ

モント号が登場し、一八一五年までにはアメリカの河川の運搬手段の主力は蒸気船に取って代わられた。そして一八一九年には蒸気船による大西洋横断も行われた。アメリカでは鉄道よりも、まず蒸気船という形で蒸気機関は普及していったのである。イギリスでストックトンとダーリントンの間で蒸気機関車の営業運転が開始されたのは一八三〇年のことだか

^⑤ 一七六五〜一八一五年。アメリカの発明家。蒸気船クラモント号を建造し、ニューヨークとオルバニ間に就航。

ら、それよりもアメリカでの蒸気船の普及は実に二十年あまりも先行していたことになる。

ニューオルリーonzで豪華な川蒸気に乗り込み、デッキで心地よい風を受けながら考え込んでしまった。

アメリカでは、何故、豪華な蒸気船が河川や湖沼こしやうを我がもの顔に走り回っているのだろう。遙か彼方の日本の島は徳川家斉^{いえなり}^⑥の治世である。一八一五年杉田玄白いえなりが「蘭学事始」^⑦を書きあげた。家斉の治世後、外国船が日本沿岸に來航して騒がせるようになったのに音を上げ、幕府は一八二五年、異国船打ち払令を出した。

^⑥ 一七三三〜一八一四年。田沼意次を排し、松平定信を老中にし、学問を奨励、寛政の改革を行った。隠居後も大御所と称して実権を握った。側室四十人、子女五十五人を数えた。

^⑦ 蘭学に関する回想録。「解体新書」翻訳の苦心談などを通じて、日本の蘭学の播種期について書かれている。

しかし、その当時の日本の舟運の主役はまだ帆掛船^{ほかけ}だった。長崎の出島^{でじま}で細々と幕府直轄貿易が営まれていたが、そこで見かける貿易船もオランダの帆船か清のジャンクだった。



<http://www.obayashi.co.jp/kikan/deshima/>

改めてアメリカの川蒸気の盛大な運行の背景を調べたら、アメリカ開拓の歴史に纏^{まっ}わる錯誤に気付いた。インデアン、騎兵隊、銀行強盗、大陸横断鉄道など主役の西部劇映画などのイメージが刷り込まれ、それにすっかり引きずられていた。アメリカ大陸の開拓の歴史は、先ず、ヨ

ーロッパと船で直接に繋^{つな}がる大西洋沿岸から始まり、その延長で船が入ることのできる河川と湖沼に沿って進んでいったというのが真相のようだった。決して馬と幌馬車ではなかった。アメリカ大陸は船舶が航行できる大河川と大湖沼に恵まれていた。

建国時代のアメリカ人の生活圏は川や湖沼^{こしやう}とピツタリ結び付いていた。だから蒸気船の導入が蒸気機関車に先行したのは当然だろう。ミシシッピの華麗な賭博師でもあったバット・マスターソン[®]がアメリカ開拓を彩^{いろど}るスターだった。アメリカ映画は、未知の人、馴染みのないビリー・ザ・キッド[®]を起用して興行成績を

稼いだ。お陰で、アメリカ開拓の名誉まで馬とカウボーイが攫^{さら}ってしまったようだ。もつとも、これは私がただアメリカの開拓とアメリカの西部開拓を混同していただけのことだったのかも知れないのだが……。

海を渡る蒸気船艦隊の登場

蒸気機関はアメリカで船に載せられ、アメリカ開拓とアメリカン・ライフの形成の大きな牽引^{けんいんりきよく}力となった。さらにアメリカの河川や湖沼^{こしやう}で育った蒸気船は帆船に代わって世界の海に出て行くことになる。その先兵となったのは軍艦だった。アメリカは一八一四年、イギリスに先駆けて蒸気機関を搭載し、それを推進力とする軍艦を建造した。

® 一八五六〜一九二一年。アメリカ西部開拓時代のガンマン・カンサス保安官の後、ルーズベルト大統領の要請でニューヨーク連邦保安官助手に。その後、新聞記者に転身する。
® 一八五九〜一八八一年。アメリカ西部の無法者。二十一歳で射殺されるまでに二十一人を殺したといわれる。

蒸気機関を発明したイギリスで、蒸気

機関で推進する軍艦が進水したのは、アメリカより一九年も後の一八三三年のことである。当時、イギリスはすでに世界の七つの海に展開する大帆船艦隊を擁していた。多分、それが足枷あしかせになって、これらを蒸気機関推進に切り替えることを決定するのに一九年間も逡巡しゆんじゆんする結果になってしまったのだろう。

同時代の江戸に目を移すと、十八世紀後半にはロシア船が蝦夷地えぞちに來航し通商を求め、十九世紀に入ると薪炭しんたんや通商を求め、アメリカやイギリスの船も來航するようになっていた。一八一八年にはイギリス人ゴルドンが浦賀にやってきて貿易を求めた。こうした諸外国の帆船が來航して騒然となり始めたなか、一八二五年、幕府は異国船打払い令を出した。しかし、まだ帆船が主役の時代だった。



<http://www.city.odawara.kanagawa.jp/encycl/ukimages/07.htm>

に四十年近い蒸気機関推進の軍艦の運用実績を持つていた。この黒船を目の当たりにした徳川幕府の首脳は、アヘン戦争に中国清朝が敗れ、それを契機に中国が

日本に蒸気機関で推進する船舶が初めて出現したのは、有名なアメリカのペリ
ー提督率いる黒船で、賀沖に來航したのは一八五三年のことである。

この時、アメリカはすでに
揚子江を溯さかのぼって南京に迫ったために、清朝は和を請うこととなったと歴史書にある。広大な大陸国家の清朝が大敗し、和を請うことになった決定的な要因は、揚子江を溯行して南京に迫った英国艦隊だったようだ。

①一八四〇〜一八四二年。清の阿片密貿易禁止をめぐる英国と清朝間の戦争。一八世紀末以降、イギリスが中国からの茶や絹織物の輸入に必要な銀を確保するため、インド産アヘンを中国に持ち込んだ。そのため中国では阿片吸煙の害が政治問題化すると同時に、阿片貿易による銀の国外流出が財政問題にもなった。このため中国は阿片の没収、棄却など強硬策を採ると同時に、英国との交易禁止を行った。これに対してイギリスは一八四〇年に遠征軍を派遣、一八四二年、総攻撃を再開したイギリス軍に大敗、南京条約締結。清の鎖国は崩れた。阿片――ケシの未熟な果実に傷をつけたとき分泌する乳状液を乾燥して得るゴム状の物質。モルヒネなどが主成分とする代表的な麻薬。

ところでアヘン戦争に参戦したイギリス軍艦が、いったい帆船だったのか蒸気船だったのかだが、アヘン戦争が勃発した一八四〇年という年は、イギリスが初めて蒸気機関を軍艦に採用してから七年後に過ぎないこと、イギリス艦隊が揚子江を南京まで溯航した^{そこう}のは一九四二年になつてからのことなどから推測すると、多分、まだイギリス艦隊の主力は帆船であつて、蒸気機関推進の軍艦は艦隊のごく一部を占める存在でしかなかつただろう。それも後から艦隊に加わつたものだったような気がする。

マルコ・ポーロからアヘン戦争へ

ヨーロッパ世界のアジア進出というと、イタリア人コロンブスが大きく浮かび上がってくる。コロンブスは、一四九二年、コロンブスが残した黄金の国ジパングな

いしチパングを目指して大西洋を渡つて、アメリカ新大陸を発見したことになつてゐる^⑩。当時のヨーロッパ世界に冠^{かん}たるイスパニアのイザベラ女王の後援があつたといつてもコロンブスが乗つたサンタ・マリ号は木^こつ端^つ帆船^{ぱん}だつた。今でも、そのレプリカが、バルセロナの港に係留されて観光客を待っている。

コロンブスを動かした黄金の国、ジパングの出所はマルコ・ポーロの「東方見聞録」^⑪である。ベニスの商人マルコ・ポ

^⑩ 一四四六または一四五〇年。イタリアのジェノバで生まれ。数学者らの影響も受けて、大西洋を西航してインドに達し得ると考えた。一四九二年スペイン宮廷の援助を得ることに成功。サンタ・マリア号など三隻の船で出帆し、一四九二年十月バハマ諸島の島に上陸。サンサルバドル島と命名。新大陸発見の緒を開いた。一四九三年帰国。第二回航海(一四九三〜一四九六)ではハイチに植民。第三回航海(一四九八〜一五〇〇)ではトリニダードを、第四回航海(一五〇二〜一五〇四)ではホンジュラスなどを発見した。しかし宮廷は彼を重用せず、彼は死に至るまでアジアの一部を発見したと信じつつ失意のうちに死んだ。

^⑪ マルコ・ポーロが一二七二〜一二七五年、東方諸国で見聞したことを、一二九八〜一二九九年にジェノバの獄中で同囚ルステケロに口述筆記させたと言される旅行記。特に元代の中国



<http://www.jti.co.jp/Culture/museum/tabako/denpa/>

ーロがジェノバの獄中で口述したという、三百代言を書き写した「東方見聞録」である。コロンブスはイタリア人だつたから、「東方見聞録」熱心に読み、それに書き込みまでしていた。ジパングへの夢を繰り返し確認していたのだろう。

マルコ・ポーロが、元王朝の中国を後にして父親と叔父の三人で、二五年振り

について詳しく、日本もジパングの名で初めて欧州に紹介された。この書はアジアへの関心をそそり、新航路・新大陸発見への一つの誘因ともなった。

にベニスに戻ってきたのは一二九二年だった。コロンブスがポルトガルの港を発ったのは、奇しくもマルコ・ポーロがベニスに戻った時から二百年後の一四九二年だった。数多くの写本・異本があった東方見聞録がラムージオによって集大成されて編集刊行されたのは一五五九年だから、コロンブスはそれ以前のどれかの写本の一冊を懐ふとしろにしてジパングへの夢を膨らませていったのだろう。^⑬

マルコ・ポーロの「新大陸発見」から百年近く経った一五八八年、日の没することのないと言われたスペインの海上覇権は、その無敵艦隊の壊滅と共にイギリスとオランダに篡奪さんだつされた。^⑭一六〇〇年

^⑬ 「謎の共同編集者」マルコ・ポーロの「東方見聞録」異聞

―鈴木徹也 帝京大学外国語外国文学論集 第九号

^⑭ スペインがイギリス侵攻に派遣した艦隊の呼称。一二二隻（兵員二万四千人）の艦隊だったが、ドレークらの率いる英国艦隊に惨敗。この敗北がスペイン没落の序曲となった。

には、イギリス商人がエリザベス女王の特許を得て東インド会社を設立。東インド会社は大英帝国の植民地獲得の先兵としてアジア各国の臨海部に商圏を拡大し、インド・ムガル帝国の領土も侵食していった。そして中国からの紅茶輸入が大幅の貿易赤字を生んだことに端を発し、それを購入する銀を得るためインドからケシから作られる麻薬、阿片あへんを中国に持ち込んだため、前述の阿片戦争あへんが引き起こされることになったのである。

ペリーの艦隊が黒船でなかったら

今、北朝鮮が、麻薬や偽札やミサイルなどを輸出して外貨取得に躍起になっているが、二〇〇年近く前に、イギリスが赤字減らしの商業活動として同じことをやっていたのだ。イギリスがスペインから制海権を篡奪した先兵が、イギリスの

海賊だったことを考えると、今の北朝鮮の行為も分からなくはない。北朝鮮の非は、国家の存立は正義をもって飾り立てなければならぬという基本を危うくしていることにあるのかも知れない。

話を戻そう。一八四〇年に始まった阿片戦争の現場に目を移すと、前述の通り開戦時にはイギリス艦隊は帆船が中心だったはずである。清朝の軍首脳は、帆船艦隊なら攻められても沿岸部に限られると多分、多寡たかを食っていたのだと思う。

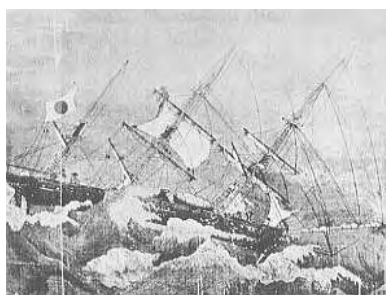
ところが、そこに蒸気機関で動く軍艦が現れた。それが風向きなどをもちもせずに揚子江を溯航そこうしてくる姿を見て驚愕きょうがくしたに違いない。それで清朝は戦意を喪失したのだろう。中華思想に縛られた清朝は、清国に恭順の意を表して外国

人が運んでくる新式の技術は珍重したが、その文明の利器を持って攻めてくる外国があるなどとは想定してはいなかっただろう。

あくまでも想像だけれど、徳川幕府も、すでにいろいろ世界情勢に関する情報は入ってはいたけれど、大部分の人たちの意識は、阿片戦争^{あへん}当時の清朝の人たちと似たり寄ったりではなかったのではないだろうか。

しかし、時代が幸いした。浦賀沖に四隻の蒸気船の黒船艦隊が現れたのは、阿片戦争の後、約十年、一八五三年のことである。当時、幕府には対抗して出撃できる軍艦がなかったことは中国清朝と大同小異だった。その事実は清朝での出来事を通じて伝わっているはずであり、う

で日本では彼我の戦力の違いを疑う者はいなかったと思う。



http://nippon_kinshu_doumei.at_infoseek.co.jp/topic-ando-taro-u-den-01.html

ためにお台場に砲台を築くだけの防戦一方である。

これは仮定だが、もし、ペリーが黒船ではなくて帆船で来航していたら、幕府の対応は全く違ったのではなからうか。江戸の防衛のために開国に踏み切る大英断は出来なかったろう。相手が帆船だったら、江戸の幕閣は威信を誇示するためにも、アメリカ艦艇を撃滅する主戦論に

傾いたかもしれない。

「歴史技術説」

浦賀沖に出現した艦隊が全艦蒸気船であったことが、ペリーの奉呈^{ほうてい}したアメリカ大統領親書を受け入れ、開国に踏み切った幕閣の最大の判断材料になったように思われる。ともかくイギリスに二十年近く先行して戦闘艦隊の蒸気船化に着手したのがアメリカだった。アメリカは、蒸気機関車より前に蒸気船の実用化を促進した国だったのである。

イギリスが鉄道によって陸上の時間距離を短縮し、内陸に向かって「市場化」と「標準化」を推進した。ほとんど同時に、それに対してアメリカは蒸気機関を船に搭載することで、海洋を越えて世界の「市場化」と「標準化」を主導する道

を歩み始めたのである。

もちろん、アメリカが世界を主導する
という意識を明確に持っていた痕跡こんせきはな
い。独立以来、「孤立主義」が息づいて
おり、その延長線上で、一八二三年には
有名なモンロー・ドクトリン[®]を打ち出し
たし、二十世紀に入っても第一次世界大
戦に参戦したのは開戦から三年後であり、
大戦後の国際連盟にも加盟しなかったの
である。

アメリカが世界に先駆けて蒸気船を普
及させることになったのは、アメリカの

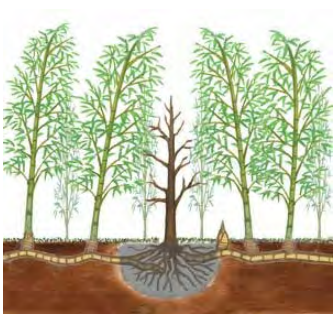
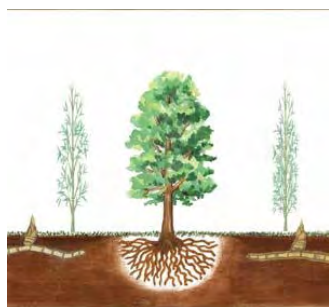
[®] Monroe Doctrine アメリカの基本的な外交方針の一つ。ヨーロッパと一線を画すという姿勢は、アメリカ独立革命のころから見られたが、一八二三年に第五代大統領モンローが初めてこの立場を明確にした(モンロー宣言)。この「モンロー主義」と呼ばれる外交方針は、その後繰り返し表明され、アメリカの基本的な外交原理の一つとなった。しかし、時代の推移とともに拡大解釈され、二十世紀に入ると、アメリカの大陸諸国に対する干渉を正当化する原理にもなった。

開拓が、その地勢から河川と湖沼を利用して進められたことに起因している。そして、その延長線上で、世界に先駆けて蒸気機関駆動の軍艦を導入することになったのである。建国から日も浅く、イギリスのように大きな帆船艦隊もなく、身軽に新技術の導入を進めることができたという要因も無視できないだろう。

繰り返しになるが、こうしたアメリカの蒸気船の発達の歴史には、アメリカが世界の主導権を握るという意図や選択が働いていたという痕跡こんせきは微塵みじんもない。

しかし、当時のアメリカの政治的な意図とは別に、蒸気船を軍艦に採用した時から、アメリカは海を隔てた国々に門戸開放を迫り、世界を「市場化」し、「標準化」する主役となり、その役を演じ続けてき

たことは歴史的事実である。その先駆けが欧州の帝国主義と植民地主義で、それをアメリカが引き継いだ形だが、そこに政治的な意図や選択が働いていたとは思えない。蒸気機関を船に搭載したことからくる歴史の必然としか思えない。



<http://fgh-hp.hp.infoseek.co.jp/page262.html>

こんなことを考えていたら、技術が地下茎のように延び拡がり、それが地上に現れて芽を吹き、歴史を動かして行くというような仕組みが

目に浮かんできた。

それを「歴史技術説」と呼ぶことにした。人類が太古から育ててきた技術の地下茎が歴史を決定的に動かしているという仮説である。今や、この技術の地下茎は地球を覆い、大気圏外にまで届くようになってきている。

地下茎が素朴だった時代は、それを剪定する^{せんてい}など人が積極的に地下茎を制御することも可能だったろう。しかし、それが網細血管のように地球全体をカバーするようになった現代では、ますますこの地下茎の自律的な動きに、技術の^{おもむ}動きによって歴史が動かされるようになってくるような気がする。

アメリカは、イギリスとは違って蒸気

機関を馬車ではなく、まず船舶に適用することによって、陸ではなく海を制覇^{せいぱ}する技術を発展させた。そのため建国以来の「孤立主義」にもかかわらず世界を主導する役割を担うことになってしまった——蒸気機関の発達を眺めていたら、この歴史的事実に直面し、そこから「歴史技術説」という仮説が頭に浮かび上がり、今回の「時空の漂泊」のモチーフになってしまった。

この「歴史技術説」に従えば、アメリカは多くの分野で最先端の技術を持っており、それを持っていることがアメリカの意思決定を否応なしに左右して行くということになる。大量の原水爆弾を保有し、最先端のロケット技術を開発し、監視衛星を巡らし続けているアメリカは、その意志とは無関係に世界政治の主導権

を放棄することはできないということである。もつと言えば、アメリカは最短でも今世紀一杯は世界の政治経済のヘゲモニーを保持するだろうという推論に辿り着くことになる。

パンドラの箱に尋ねたい

もちろん、アメリカの現在の政治の中枢部にいる人たちが、ここで披露したような「歴史技術説」に対して、どのような見解を示すのかは定かではない。余りに単純で決定論的な仮説であることは十分に承知している。様々な力が、時として無関係に作用し、その結果として今後とも歴史が積み重ねられていくのだろう。しかし、私は、歴史の基本的な潮流は「歴史技術説」に軍配を上げることになるに違いないと思うようになってきている。

ともかく十八世紀後半のイギリスの蒸気機関の発明と開発と導入の現場では、その膨大な波及効果を含め、それによって歴史が動くとは微塵も思われていなかったはずである。文献をいくら調べても、歴史に対する明確な見識や見通しあったとは思われない。

蒸気機関車に先行して蒸気船が普及したアメリカも同じことで、ミシシッピを上下する豪華な外輪船でカクテルを楽しみながら賭博に興ずる人たちのうちのいったい誰が、それが、ペリーが艦隊を率いて日本の門戸開放を迫ることにまで繋がるかと予想しただろうか。

十八世紀の蒸気機関の誕生から、その後を追いながら「時空を漂泊」したら、偶然が十重二十重、上下左右、東西南北に

重なり合って流れてきたと考えていた歴史が、実は偶然ではなく、歴史の必然の軌に嵌って動いてきているような、これまでとは違う一つの姿が浮かび上がったように思う。まさに「時空の漂泊」の醍醐味である。

アメリカは、旧大陸に対する反発と自立から「孤立主義」が建国以来、その根底にあつて、かつては不干渉主義を世界向かって標榜した。そのアメリカが、最近では、「人道主義」の確保・維持・普及という御旗を掲げて、世界に向かつて主張している。

そうしたアメリカの姿勢に異論がないわけではないが、その明快さには、技術の明快さに極めて近いものを感じる。この明快さが、多くのアメリカ人の共感を

得て、多くの問題を抱えながらも、アメリカ人であるという一体感の意識を生み出しているのだろう。それは、多分、多民族国家あるいは多民族社会——歴史的に眺めれば、現存する多くの国が何百年、何千年も前にすでに経験してきたることなのだが——という意識が新しい国だけに色濃く残っているアメリカにあつては、必要不可欠なことなのかもしれない。

そうだとすれば、現在、アメリカは技術に対しても相性の良い国であり、社会であるということになるだろう。諸々の価値判断に左右される「美しさ」をもって多様性を統合するのではなくて、分かりやすい「機能」の優劣をもって多様性を統合して行こうとする。それ以外ではなかなかアメリカというものを統合する

ことが難しいということが、実は、価値観の問題ではなく、現在の世界にあってアメリカが担えると同時にアメリカに期待される真骨頂しんこつちようのように思えてくる。

もつとも私個人が技術進歩が歴史を動かしているとする単純な「歴史技術説」という私自身が提唱する仮説を、自分の価値観に照らして全面的に肯定しているわけではない。ギリシャ神話のプロメテウスが天界から火を盗んで人に与えた結果、パンドラの箱はこが開いて災いと悲劇を撒まき散らしたという話は今でも生きていると思っっているからである。

⑥ パンドラ。ギリシャ神話における地上最初の女。プロメテウスが天上の火を盗み人間に与えたのを怒ったゼウスは、仕返しに人間に災いをもたらせようと、泥から人間の女を作り、あらゆる災いや害悪が詰まった手箱を与えた。彼女は見てはいけないと忠告されたが、好奇心から開けてしまった。その中身はたちまち四方に飛び散った。パンドラはあわてて蓋をしたが、その中にはむなし「希望」だけが残ったという。

今回は、何やら禍禍まがまがしい物言いものいで締めくくることになってしまったが、これも、「時空の漂泊」のなせる業わざというか功德くどくということにさせて頂きたい。連想の糸がギリシャ神話に繋つながることがあれば、「時空の漂泊」の場を借りてプロメテウスと言葉を交わし、プロメテウスの所業しよぎように怒ってパンドラを造り、それに開けられるということを予想しながら、人間の「不幸」の元になるものを詰めた小箱を持たせたゼウス⑦の恣意ししいについて問い掛けてみたいと思っっている。

(壺宙計画)

⑦ Zeus。ギリシャ神話の最高神。